

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 4日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ~ 2012

課題番号：22500557

研究課題名（和文） 体育授業における子どもの認識発達に関する研究

研究課題名（英文） Study on the Development of Motor Awareness by Analysing the Essay writings on Physical Movements

研究代表者

石田 智巳（ISHIDA TOMOMI）

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：90314715

研究成果の概要（和文）：

身体運動に関わる子どもの認識がどう発達するのか、それを感想文からどう読み取るのかについては、実証的な研究はほとんどされていない。本研究では、運動学習における子どもの認識発達を捉えるカテゴリーの設定、そのカテゴリーを用いて授業の内容と子どもの認識の関係を明らかにすることを目的とした。その結果、「結果」「課題」「構造」のカテゴリーが取り出された。また、動作の順序やタイミングの記述が難しいということが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

Practitioners have offered many theories on children's awareness regarding the development of physical movements through physical education so far; however, very little empirical research has been conducted because of lack of refined research methodology. This study aimed to (1) establish categories to understand the development of children's awareness in motor learning and (2) demonstrate the relationship between the curriculum and children's awareness. For this study, essay writings on physical movements were analysed. The results were grouped in 3 categories: "results", "subjects", and "structures". Further, they expressed difficulty in describing the order and timing of these movements.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：身体教育学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、身体教育学

キーワード：体育授業，子どもの認識

1. 研究開始当初の背景

(1) 学習指導要領改訂と「言語活動の充実」

2008年3月に改訂された学習指導要領では、柱として「身体能力」「知識、思考・判断」「態度」の3つが示されている。この「要領」の改訂の契機の一つには PISA ショックがあり、そのために各教科で読解力(PISA 型読解力)をつけることが要請されてきた。具体的には、「発達の段階と言語の果たす役割を踏まえ、記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動を各教科等において意識的に充実を図る。」(文部科学省、学習指導要領解説、2008)と表現されている。

この「要領」では、体育の柱の一つである「知識、思考・判断」が、言語活動の充実と関わる部分であるが、同時に体育の柱としては「身体能力(技術的能力と体力)」の重視も特徴としてあげられている。

したがって、今後の体育では、技や運動課題が「できる」ことと、言葉によって「わかる」ことが重視されていくことになる。

(2) 体育科教育における「わかる」こと重視の歴史と研究の蓄積

ところで、国語のような概念を中心とする教科における言語活動と、体育のように体を動かすことを中心とする教科における言語活動は、異質なものとしてとらえる必要があり、そこに「教科を区別するものさし」があるという指摘もすでにされてきた(城丸章夫、中内敏夫など)。

また、実践レベルでも、体育で書く、話すなどの言語活動を行うことは、我が国にはすでにそれなりの蓄積がある。体育が、単に「できさえすればよい」というものではなく、合理的な学習のために「わかる」ことが必要だということが確認されたのは、1970年代の後半に始まる体育の学力論議においてであっ

た。

その議論よりもさらに 20 年も前に、たとえば佐々木賢太郎(1923~1994)は、生活綴方に学び、体育授業でも鉛筆と帳面を持たせて、その時間に起こったことや感じたことを綴らせていた。佐々木の場合は、必ずしも今の「わかる」ことの重要性と同様の意味合いを持たせていたわけではない。それでも、その後、教育科学研究会身体と教育部会や、学校体育研究同志会などの民間教育研究団体がこの問題に取り組み、一定の実践の蓄積を残している。行政レベルでいわれる「わかる、できる」体育はこのような歴史の中に位置づける必要がある。

(3) 先行研究の検討と問題の所在

このような研究の蓄積があるとはいえ、実践レベルでは研究方法の未熟さから、体系的な研究が進められてきたわけではない。むしろ、これまで啓蒙的な議論がなされてきており、技術と認識の関係が明確にされているわけではない。また、この分野では K.Meinel や金子明友らの運動学が議論をリードしてきたが、小学生の技術認識と高校生の技術認識が同じような発達を遂げるのかという素朴な疑問を呈することもできるのである。したがって、指導要領解説に見られる「発達の段階と言語の果たす役割をふまえ」という文言が実質的なものになるためには、発生や発達という観点から、技術と認識をとらえなければならないのである。

2. 研究の目的

本研究は、体育科教育における言語活動の内実を発達という観点から明らかにするために、運動技術の学習と認識の発達に観点をあてて、以下の研究課題について理論的な解明と実践的な検証を試みることを目的とする。

(1) 子どもの運動的認識発達を捉える理論

的な枠組みの検討

スポーツ運動学, L.S.Vygotsky, L.S.Rubinsteinや佐藤学らの認識発達の理論をもとに, 子どもの運動に関わる認識の発達を検討する。同時に, 阪田の仮説を理論的に検証しながら, 仮説を提示する。

(2) 感想文を分析するためのカテゴリーの設定

同一教師による2年, 4年, 6年生のマット運動のグループ学習で行われた授業(授業はあくまでも予定)を対象にして, 授業内容や教師の働きかけ, 子どもの様子を映像に残す。そして, 感想文分析のカテゴリーを設定するとともにその有効性を検証する。

3. 研究の方法

目的に示したように, 研究課題は二つを用意した。まずは, 運動に関わる認識発達の理論的枠組みの検討であり, この検討には, 大きく3つの作業課題が含まれている。

(1) 体育授業で子どもの認識を重視する経緯とその変化

ここでは, 主として歴史的な経緯をふまえる意味と, 特に1970年後半に起こる体育科教育の学力論議以降の実践現場から提唱された「わかる, できる」論の主張のうち, 主なものを検証する。

(2) 論理的思考の発達における理論的検討

ここでは, 主として認識発達に関する理論的検討を行う。とりわけ, 論理的思考の発達に関して, Leninの認識論がいう「感性的認識から理性的認識へ」という段階説, Vygotskyの「内言と外言」の発達説, J.Piagetの発生的認識論, 佐藤学の「なぞりとかたどり」等を検討対象とする。

(3) 阪田尚彦の研究仮説と設定条件などの検討

阪田尚彦の一連の研究が提起した主張は,

今後の「体育における言語活動や認識」を研究する上で避けては通れないものとなっている。阪田は, Rubinshteinの論理的な思考の発達をベースにして, 運動学習における思考の発達の枠組みを作ろうとした。阪田の論文を読み込みながら, 阪田の仮説への道筋を検証するとともに, 阪田が言う発達の筋道である, 「客体に即した認識と主体に引き寄せた認識」を検討する。

二つ目の課題は, 理論的な仮説を元にして, 実際の感想文を分析することである。

そのために, 授業の条件とは, 同一運動領域や課題の設定, 同一教師による同一の授業形態による指導, ある程度子どもが感想文を書くことに慣れている等の条件を整備して, そこでえられた感想文を用いることで, 発達の差を導き出すことができると仮説した。そして, これらの感想文を阪田の仮説を用いて分析することで, 分析のカテゴリーを検証する。

4. 研究成果

対象とした授業は, 同一教師による, 同一教材と課題(ドル平泳法を中心とした水泳の指導), グループ学習という同一の学習形態で, 小学校の4年生と6年生という違う対象の子どもたちの感想文それぞれ約10時間分を対象とした。

まず, 阪田によって示された導き出されたカテゴリーを用いて二つの学年の感想文を分析した。それは, 結果・・・授業の課題とは関係のない内容。 客体・・・授業で行った課題に関わった内容。 主体・・・客体の記述から進んで, 自分の身体運動を通じた記述がなされているもの。しかしながら, 分析しきれない曖昧さが残ることになった。そこで, 新たなカテゴリーを設定するために, ヴィゴツキーや佐藤学らの構成主義的な認

識論を検討し、4年生と6年生の感想文の分析からそれぞれの特徴を見つけ出し、次のように感想文分析のカテゴリーを設定した。

結果・・・授業の課題とは関係のない内容。

課題・・・授業の課題は書かれているが、やり方に関する記述はないもの。 構造・客
体・・・授業の課題とそのやり方について記述しているもの。 構造・主体・・・ 構造・客体のうち、自分の身体運動を通した記述がなされているもの。

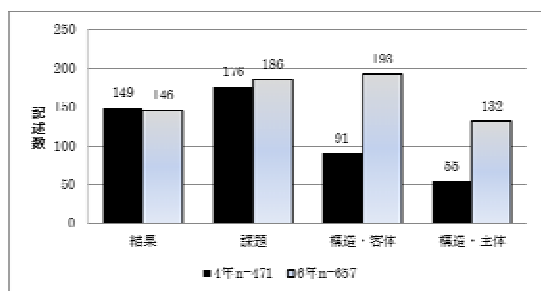


図1 4つのカテゴリー別記述数(総数)

このカテゴリーを用いると、4年生の特徴は、「結果」と「課題」の記述が多く、6年生は「構造・客体」の記述とそれを主体に引き寄せた記述＝「構造・主体」が多いということに特徴が見いだせる。特に、4年生と6年生の違いは、「構造・主体」が書けるか書けないかにある。ただし、ここで注意しておかなければならないのは、ある日のある子どもの感想文には、句点ないし読点で分けられた複数の文章があり、それぞれにカテゴリーのラベルを附与している。そのため、4年生も6年生も「結果」が多いものの、「結果」ばかり書いていたというわけではない。

そこで、1時間の子どもの感想文のうち、「結果」と「課題」が含まれていれば「課題」としてカウントし、「課題」と「構造」が含まれていれば「構造」としてカウントして、一人の感想に一つのラベルを貼って分類した(一人一記述)。それを図2に表している。

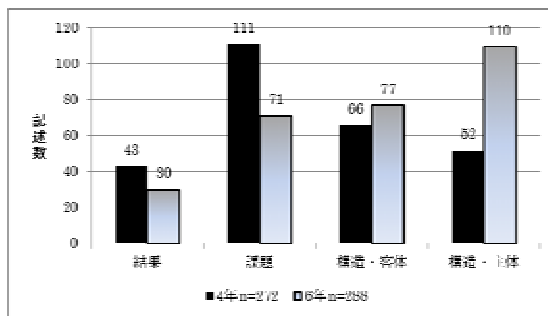


図2 4つのカテゴリー別記述数(一人一記述)

図1と図2を比較すると4年生は結果の記述総数が多い(図1)が、図4では「課題」の記述が多いことがわかり、6年生は「構造・主体」の記述が多いことがわかる。発達の差としてみたときに、明らかに「構造・主体」に差が見いだせるのである。また、運動的認識の対象ということで、「結果」の記述を除いてみるならば、「課題」、「構造・主体」、「構造・客体」が4年生は右肩下がりに減り、6年生は右肩上がりに増えているところに特徴がある。

さらに、一時間毎の課題と教師が授業で発した言葉と、子どもの感想文の関係を分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

泳力テストのように、授業に課題がない場合は子どもの感想に「結果」が増える。

平泳ぎのかえる足やバタフライの書き方などは、そもそも言葉で表さずに、視覚情報としてあらわすことが多いため、6年生でも構造的な記述ができない。逆に、動作の言葉で語られれば、4年生でも構造的な記述が増える。

動作の順序やタイミングを振り返って記述するのが難しい。

以上のことが明らかになったが、今後、別の教材や別の授業スタイルなどでも、同じように分析していくことで、一般化が図れるよ

うになると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

石田智巳 (2013) 「体育科教育における証研究 - 子どもの認識を感想文から実証的に読み取る - 」, 『体育科教育学研究』第29巻第2号【査読有り】(掲載決定)

石田智巳 (2012) 「運動的認識の発達に関する研究 - 小学校4年生と6年生の感想文の分析を通して - 」 『立命館産業社会論集』第48巻第2号, pp.111-130【査読有り】

石田智巳 (2012) 「体育授業研究の新たな方法の構築を目指して - 子どもの事実を捉える工夫 - 」 『たのしい体育・スポーツ』No266, pp.18-23【査読なし】

石田智巳 (2011) 「佐々木賢太郎の体育教育思想形成に関する研究: 『体育の子』時代の生活綴方と子どもの認識形成に関わって」 『体育学研究』第56巻第2号, pp.435-449【査読あり】

林俊雄 (2011) 「子どもを育む環境としての学校, 教師, 授業」 『梅光学院大学子ども未来学研究』第6号, pp.29-34【査読なし】

林俊雄 (2010) 「『わかる・できる』体育の授業と教師の指導性について」 広島大学附属小学校学校教育研究会編 『学校教育』第1111号, pp.32-35【査読なし】

〔学会発表〕(計2件)

発表者名: 石田智巳, 発表標題: 「体育科教育学」の学問的成果と課題 学習者の熟達過程に焦点を当てた実証的研究 体育科教育学の立場から見た実証研究, 発表学会名: 日本体育学会, 発表年月日: 2012年8月23日, 発表場所: 東海大学(神奈川県)

発表者名: 石田智巳, 林俊雄, 口野隆史, 発表標題: 体育授業における感想文分析の枠組みの検討, 発表学会名: 日本教科教育学会, 発表年月日: 2011年11月12日, 発表場所: 沖縄大学(沖縄県)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 智巳 (ISHIDA TOMOMI)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号: 90314715

(2) 研究分担者

林 敏雄 (HAYASHI TOSHIO)

梅光学院大学・子ども学部・准教授

研究者番号: 50441621

(3) 研究分担者

口野隆史 (KUCHINO TAKASHI)

京都橘大学・人間発達科学部・教授

研究者番号: 60192027